芥川賞全集　第十巻

著者　三木卓　森敦　野呂邦暢　阪田寛夫　日野啓三　林京子　中上健次　岡松和夫

昭和五十七年十一月二十五日　第一刷

定価　一八〇〇円

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

本文印刷　理想社印刷所
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本
製函所　加藤製函

万一、落丁乱丁の場合はお取替え致します

Printed in Japan

芥川賞全集

第九巻

文藝春秋

芥川賞全集

第九卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

砧(きぬた)をうつ女

李　恢　成

（第六十六回　昭和四十六年下半期）

「砧をうつ女」（昭和四十七年三月発行、昭和五十五年四月第十六刷、文藝春秋刊）を底本とした。

張述伊（ジャンスリ）が没したのは、日本の長い戦争がもう十ヵ月もすると終りを告げる冬のある日のことだった。

その日のことを、僕は鮮明に憶えている。もう九ツになっていたからであろう。少年期におふくろと死に別れたことが、僕の性格形成に影響をあたえなかったとは思わないが、その時分はまだよほど無邪気な少年に過ぎなかった。

母はよく僕のことを「ジョジョ」と呼んで、ひやかしたものである。このあだ名はいまだに正確な語意がわからない。朝鮮語に発音別にしてなおすと、「조조」か「저저」、あるいは「조저」「저조」の四通りが考えられるが、辞典にその語意とおぼしいものはないのだった。母は慶尚道の出である。新羅時代の古都・慶州にほぼ近い農村で生れている。その地方特有の子供にたいする愛称かと思って同じ道内の人に訊ねたこともあったが、ついにわからず仕舞であった。

だが、構わないのだ。どうせ、その意味は、「オッチョコチョイ」とか「おませ」「出来損い」といった部類のものなのだ。そうと類推しながらあえて人々に訊ねたのは人が悪いようだが、しかし、人々につい訊ねてみたいほど、僕はこの呼び名にふかい愛着を覚えていたのだった。

母がいつから、どんなわけで僕をそう呼ぶようになったのか、そもそものことはわからない。だが恐らく、蛸踊りのせいであろう。少年の僕は人を笑わせるのが得意で、しばしば大人達からも拍手喝采を博したものである。あの蛸踊りは思い出してみると、阿波踊りよりはタイ国の王宮舞に似ている。手首をピクリピクリ動かし首もすくめたり出して見たり。そのリズミカルな調子が芸の冴えを見せるのは飛んだりはねたりする時だった。人々はその姿からその昔、新羅の花郎（貴族階級の若武者）がめざましく舞った剣の舞を思い出して、うっとりしながら「その調子だ」とおもわず声をあげるのだった。つい僕は浮かれてテンポを狂わすのでとたんに人々の評価は落ちてしまう。どうやらそれは猿がノミをほじくりながら動き回っている図に見えるのだ。かくして、僕の踊りは「蛸踊り」といったさほど名

誉とも思えぬ呼び方で人に知られることになったのだった。
「アイゴ、うちのジョジョや。ジョジョ……」
母はおかしそうに笑っては溜息をつく。
「……どうしてお前は、ジョジョなんだい」
言われると、僕はなんだか賞められた気になり、一層踊り出したくなる。父と母が喧嘩しているとき、僕はこの蛸踊りによっていさかいを中止させてしまったこともあった。どうも気合が入らないといった表情で父は早々に喧嘩を切り上げてしまったのである。
ジョジョも大したものだ。だがその僕にもじつは弱いことがあった。どうしたものか、夜尿症のクセがあったのだ。ことに冬は鬼門であった。朝になってから僕はよく夢に欺されたのを悔んだ。たしかに今度こそはと思ったのだ。ちゃんと寝床から起き上って便所にいき、安心して放ったのである。その直後、アッと思うがもう後の祭だった。切ない気持で敷布を軀(からだ)で温める。鶏がときをつくっていた時間がとっくに過ぎて、もう起きる時刻は近づいてきている。それなのに敷布はなかなか乾いてくれないのだ。
「――。起きなさい。それから伯母(ノモン)さんの家にいって塩を貰ってきてよ」
台所で母は僕に声をかけた。僕は首をすくめた。蒲団に洩らした朝はきまってこう言うのだ。疑りぶかい眼付で母の顔を見た。そ知らぬ顔をしているが怪しいものだ。これは、お遣いではない。塩を貰いにいったが最後、伯母の手で尻が剝けるほど叩かれるってことくらいこっちはとうに知っているのだ。
はじめの内は、そうと知らずに、出かけていった。寝小便をたれた手前、これくらいの手伝いは安いものだったから。母はドンブリを手渡して、どっさり貰ってきな、と言った。
「どっさり、くれってか。ああ、いいとも」
背の低い伯母は僕を手招きした。ドンブリを手渡そうとすると、伯母は手首をしっかり摑えるのだ。どっさりな。ほうら、やるさ。これじゃ、足んねえだべ、もっとやろうか。まだ足んねえだべ――。伯母の手は僕の尻をぶっていた。その痛さったら。僕はドンブリをかの女に投げつけ、泣きながら逃げ帰った。母は胸に突進してくる子供を見て笑うのだった。
「どうだ、塩は貰ってきたか。おや、なんで貰ってこなかったんだい」
そのとぼけた口ぶりが僕には肚立たしい。なぐりかかる子供を抑えながら母はまだ笑っているのだった。そして、

寝小便をする子は朝鮮のしきたり通り、塩を貰いに行かされるのだとおしえるのである。

「いつになったら、よその子のように。ほんとに六ツにもなって――」

母はそう言って、僕に注意させるのだった。しかし、母は毎年同じセリフを子供にきかせる羽目になった。年毎に子供の年齢を変えていきながら六ツにもなって、は七ツにもなってという具合に。その僕は九ツにもなって稀に伯母の家からスッ飛んで帰ってくることがあったのである。

伯母の家にいけば、ぶたれるのはわかっているのだ。九ツにもなると、そんな智恵だけは働らいていたが、どうしたものか、そのつど出かけていくことになるのだった。母の暗示にかかってしまうせいだろうか。母の言葉はいつ聞いても何かいいことがありそうな期待を惹き起すのであった。抗いがたい不思議な魅力を感じさせるのである。まったく、とんだ災難だ！

僕が照れくさそうに家に帰ってくると、母はつい溜息をつくのだ。

「アイゴオ、いつになったら直るの。うちのジョジョや……」

その日の朝、僕は伯母に叩き起された。いかつい伯母の顔を間近に見ると、僕はすばやく敷布に手をあてて見た。大丈夫だ、湿っていなかった。僕はホッとしてかの女の顔を見つめた。それなのに、なぜこの僕をぶちたそうにしているのだろう。わざわざ家にまでやってきて――

「何をボサボサしてんだよ、ふんとに。いまどんな時だと思ってんだい」

伯母は邪険にわめいて、尻をこづいた。僕はあわてて寝床から飛びしさった。六畳のその部屋には何人もの親戚が集っていた。アバタ面の伯父は腹巻に手を突っこんで立っていたし、遠い親戚まで一人二人。どの顔も浮かぬ面持で奥の部屋を見たり眺めたり。うめき声と励ます声がまじってきこえてくる。僕は、赤ちゃんが生まれるのだろうかと思った。母は大きなおなかをしていたし、聞き覚えのある産婆さんの声がきこえてくるからだ。しかし、大人達はなぜか浮かぬ顔だ。奥の間の透かしガラス戸のそばで兄達が坐っていたが、やはり落着かぬ目付をしていた。

僕ら兄弟はその日、早目に学校へやらされた。まだ学校にいっていない下の妹達は家に残った。耳が凍りつきそうな朝だった。朝陽が透明な寒気を縫って雪の色を紅く染め出していたが、吐く息は真白だった。僕ら三人は、とある坂道で二手に分れた。中学生の兄は右手の坂を、六年生と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三年生の僕らは左手の坂をのぼっていった。校舎に入ると僕らはいちばん乗りだった。教室は冷え切っていてじっとしていると手足が痛かった。猫背の小使いさんがストーブに火を入れに廻ってきて、びっくりしたように僕を眺めたのを憶えている。

二時間目は国語の授業だった。ストーブは音をたてて燃えさかり、木つつきのようなチョークの音と鉛筆の芯をいつまでもけずる音、それにまじって弁当の匂いがうっすらと教室を包んでいた。もうすぐ、お昼だ。弁当を持たずにきたのがぼんやりと気になり出していた。伯母は弁当も持たせず、両手を振って学校へせき立てたのだ。アア、弁当ヌキか。僕は窓を眺めながら情ない気がした。校庭の一角に銅像の台が見えた。柴を背負って本を読んでいた二宮尊徳は戦場に出かけていった。衛生時間も戦争のあおりがきていた。この時間には女の先生が注入器で生徒の口に肝油を差し入れてくれる。ぬるっとした肝油は生臭いが、いそいで僕らは配られた三粒のラッカを口にほうり込んでやる。しかし最近はそのラッカの配給がなくなり、肝油注入だけになっていた。

木をついばむ音が跡絶え、ドンという音がした。先生が教壇を降りて、戸口の方に近づいていくところだった。どきりとした。何となく、自分のことのような気がしたのだ。予感は当った。間もなく、先生は深く頷ずいて、僕の方を見返り、名前を呼んだ。直ぐに病院へ行くようにと言うのである。僕はなぜか晴れがましい気持になった。「病院」ときいて、級友達が一瞬うらやましそうな表情を浮べたからである。無理もない。僕らはそこにいちど入院してみたい年頃だったのだ。「病院」ときくと、僕らはそれだけで感傷的になった。殊勝そうに席を離れた僕は、みんなのうらやましそうな視線を背後に感じながら、廊下に出ていった。

六年生の兄が思いつめた顔で立っていた。

「すぐ病院さ来いってよ。わかるべ」

兄は僕の上気した顔を見て、咎めるように言った。それから問答無用の態度で、長い廊下を滑り出していた。校舎を出ると、雪の紫外線が眩ゆかった。兄は僕をせき立てて走ったが、やがて舌打ちを一つ残し、振り切っていってしまった。M庁立病院までの長い雪道はよく滑った。人馬が踏み固めた道はワックスがかかったように光り、足を取るのだ。なんども転んでやっと病院にたどり着いた僕は、いたずらに病棟の廊下をうろうろした。母の病室がどこにあるのか見当がつかなかったからだった。廊下は奥に迷いこ

むほど陰気な気がした。渡り切ると戸の外に墓がいっぱい立っていそうな不安が胸をしめつけてくるのだった。だから、どうにか母の室を探し当てた時は、うれしさで声をあげてしまいそうだった。

だが僕は半びらきのドアから軀をすり込ませると、壁に背中をぴったりつけたまま身動きしなくなった。先に到着した兄がこぶしを両眼にあてていた。中学生の兄は天井を睨みつけていて、父は洟水をすすりながらその兄に何やら話しかけている。その光景はまだ僕に母の死をはっきりと感じさせなかった。これまでになく親密に親が子に語らいかけ、大きな心配事をかかえて相談し合っているように見えた。ベッドの母は父親とわが子の語らいを耳にしながら安心して眠っているようにうつる。これで息子達を父親にかえしてあげたと思っているかのように。僕らは家庭の中で、いつも母贔負だった。それには理由があったが、子供の眼に母は弱い者として感じられていたのである。

父はやっと僕に気づいて、湿った声で呼んだ。何と呼んだのだろう。その言葉には四十歳で妻を失った男の感傷と五児の親の気丈さが綯い合わさっていたはずだった。ふと僕はそこに父の憎しみさえかすかに感じ取った。母親が死んだのに泣きもせず、いつまでも壁に貼りついている三男を見て父は一瞬容赦できぬような表情を浮べたのである。幼少の時分から父は時たまそんな眼の色を浮べた。夜中に目が醒めると、僕は枕をかかえて父母の部屋に入っていった。母はどんな時でも寝床に入れてくれたが、父は苦笑するか、いまいましそうに追い払おうとした。母の軀のどこかに自分の軀を触れていると安心して眠れるのである。僕の足のかかとが母の下腹の固い部分に乱暴にのせられていることもあった。おかしな子だよ、と母はそっと足を外し、僕を抱きすくめるが、父はあっちへ戻せと言うのだった。

父に呼ばれると、僕はピクリとふるえ、ドアの隙間から廊下へ逃げ出したいほどの恐怖を覚えた。母のお供をさせて、一緒に死なそうと父が考えているような気がしたのである。おまえは「ジョジョ」と呼ばれて特別可愛がって貰ったのだから、母さんと一緒にあの世に行ってやれ……。妄想が惹き起したこの架空の声はほんとうに父の口から発せられたように迫ってきたのだった。僕は肩で息をしながら壁から動けずにいた。懇願するように父を見つめながら。そんな子供の眼差を父はかなしみのせいなのだと感違いをしたのであろう。かれは子供の手をとって母親のかたわらに連れていった。

「もう可愛がって貰いたくてもできないんだ。もう……」

父は涙声でしゃくりあげた。そして僕らに母親の最期を説明するのだった。それによれば、「自分の手を握って」子供のことばかり心配していたというのである。「どうなるの。私が死んだら、子供達はどうなるの」と譫言のようにそればかりくりかえしていたというのである。

病院にかつぎこまれると、母はすぐに帝王切開をうけた。昨夜からの出血がはげしくて自力で分娩することができなかったからだ。胎児はまるまると肥えていたが、取り上げられるとすぐに死んだ。母親はそれからじょじょに血の気がうせていき、児のあとを追いかけていった。

母のかたわらに産着にくるまれた赤ン坊が置かれていた。その子は本来なら僕らの六番目として祝福されるはずであった。しかし僕達はそのとき母の死にすっかり心を奪われていて、六番目の不運にはまるで気づかずにいるみたいであった。

葬式の間じゅう、僕は陽気に振舞っていたものだ。

考えてみると、葬式は子供にとっては祭とたいしてかわらない。病院で流した僕の涙はもうすっかり乾いてしまっていたし、どうしても祖父母のようにいつまでも歎くわけにはいかなかったのだ。それにどうしたものか、母が永遠に死んでしまったという気が起らないのだった。棺を見ると、確実に母は別世界の人だった。けれど家に集まってくる人々を見ると、なにか祭がはじまるようにうつり、どの人々も母を讃えにやってきたみたいで僕はだんだん気持が浮かれていくのだった。

この夜ばかりは燈火管制も大目にみられた。わが家だけの特権に見えるのだ。明りは雪を照らし、そこここに立てられている花輪や喪章のついた協和会（日帝時代、「内鮮融和」のためにつくられた組織）の旗を浮き出たせていた。僕は得意であった。多くの花輪や旗を見て近所の子供達がすっかり萎縮していたからだ。いつもは威張っている子も今日ばかりは一目置くような素ぶりをみせるのだ。大人でさえ僕に敬意を払っているように思われた。なんとなく祭の稚児さんになった気持になった。母をまつる祭なのだ。僕は人々の注意を惹きつけるため、しおらしく霊壇に焼香をしてみせたり、生あくびを噛んでそおっと涙ぐんでみせた。

そんな孫のようすを眺めて、祖母は膝を叩いて歎くのであった。

「アイゴー、ジョジョや。ふんとになにも知らねえでえ」

中学生になってつくった詩に「追憶」というのがある。下手な詩だが、僕にはなつかしいものである。

少年が泣いている。少年のかなしみは天に届き、あわれみの涙をこぼす。氷雨が降っている日、少年は母の骨壺を胸にかけて火葬場から出てくる。コトコトと母の音がする——そんな内容のたわいない詩であった。

この詩は、いくらか事実と喰い違っている。少年は一篇の詩をつくるのにキュウキュウとして、事実を都合よくつくり変えてしまっているのだ。

母を野辺送りした日は氷雨でなく、吹雪が舞っていた。樺太の冬は気候が変りやすい。海鳴りがきこえてくる浜辺のわが家から雪橇（ゆきそり）で出発した時はまずまずの日和だった。町をぬける頃になって雪がちらちら降ってきたが、すぐに陽が幌に差しこんできた。馭者がばんばに鞭をくれている。鈴の音が高まる。僕は上機嫌だった。生まれてはじめて幌馬車にのって雪原をいくのだから。幌の中は窮屈だが、ちっとも気にならない。火葬場までは一里余りだった。それはなだらかな山裾の丘をのぼりつめた所にあって、雪橇はあえぎながらのぼっていくのである。幌の窓から後をのぞくと、はるか後方におぼれ谷からせり出した海が拡がっていて流氷が浮んでいる。目を前に転じると、だけかんばや白樺の林が迫ってくる。養狐場を過ぎると、火葬場の煙突が見え出すのだった。もうひとふんばりだ。僕は隣の祖母にそのむねを告げる。祖母はまったく不機嫌だった。彼女はウウと押し殺した声でうなずき、すぐに沈黙におち入るのだった。

とつぜん雪原がさっと灰色にかわり、幌の隙間から雪が吹きこんだ。雪嵐が起ったのだ。伯母がみんなの膝にいそいで毛布をかける。祖父は杖に手をのせて目を閉じたまま、何も気づかぬ風だ。幌が裂けそうに鳴り、鞭を鳴らす音が風にちぎれていく。ばんばが癇高くいなないて前肢をむなしく蹴立てる。まがまがしい雪嵐はつのるばかりだ。それは人々の胸に不吉な想いをかき立て、幸せだった昔を思い出させる。と、それまで不機嫌だった祖母が毛布をはねのけて叫び出すのだった。

「おお、うちの述伊（スリ）がいやじゃと泣いているんじゃ。あれはうちの娘の叫び声じゃぞ」

伯母が腕を押えて、なぐさめにかかる。

「なんの。ただの吹雪じゃが。落着きなさいまし。述伊はもう召されましただ」

「述伊が、述伊が……」

伯母は溜息をついて、言いきかせる。

「みんなパルチャ（八字＝因果の意）だべ。みんな、いつかは魂だけになってしまうだべよ」

僕は大人達の切なげな話に耳をすます。パルチャという言葉が珍らしくきこえる。パルチャか。そいつの仕業で母ちゃんは吹雪のなかをさまよっているのだろうか。魂の行手が気になり出し、なんとなく僕も胸騒ぎを覚えるのだ。

夕方になって、雪嵐は凪いだ。火葬場から引き返す時、僕は一番目の兄からちょっと骨壺を借りうけてみた。首にかけると、骨壺はかいろのように温かかった。この中に魂が残っているのだろうか。しかし、軽すぎて、やはりどこかへさまよっていったようであった。骨壺の軽さが、ふうっと自分だけの存在を感じさせた。僕はうろたえて遺骨のつつみを一番目にもどしてしまった。

とはいえ、僕は母が死んでこたえていたわけではなかった。周囲がにわかに親切になったので、むしろ驚ろかされたくらいである。じっさい、親戚達の親切さったら。伯母なぞ、以前なら僕さえ見れば、尻をぶちたそうに身構えたものであった。そうだ。いちどなど、僕の唐辛子をハサミで切るといってつまんだことさえあった。一生、つかえないようにしてやる、と僕を脅かしながら。それがどうだ。今じゃ、すっかり別人だ。僕が遊びにいくと、こちらをしんみり眺めて溜息さえつくのだった。

「どうだ。メシたべたか？」

「ああ、くってきたよ」

「何だったら、たべなよ」

僕は驚ろいてかの女を見直した。伯母は大変なしまり屋だからだ。有名なカッジェンイ（しまり屋）だ。赤ン坊を生むのに産婆に金を出すのが惜しくて、自分ひとりで生んでしまうのだ。僕はこの伯母がメシをたべろとすすめても、めったに箸を取らなかった。かの女が糞壺の中に赤ン坊を生み落してしまったことを知っていたからだ。その児が僕より一ツ年上のスンテだった。糞まみれのスンテを拾い上げ、ヘソの緒を噛み切った伯母はその手でいつも御飯を炊くわけだ。僕が「腹いっぱいさ」と大抵遠慮するわけだった。しかし、気分はよかった。塩を貰いにいった時はぶつだけぶって一握りも寄こさなかった彼女が、こうも気前よくなったのだから。

伯母に毒気がなくなったように、他の女達もいつになく優しくなっていた。かの女達はわが家にやってきて、洗濯をしたり、食事の準備までした。父は不機嫌にその動作を

無視している。かの女達はわが家に舞いもどると、あれこれ気ままな噂をするが、その辺は子供のあずかり知らぬ所だ。時たま、かの女達は自分の家でメシをくわせながら、うるさく聞くのだった。

「どうだ、それから？」

何のことだろう。僕は意味が摑めずに問い返す。

「淋しいかっていうんだよ。おまえ」

かの女達は、きまった答を僕から引き出したがっているようだった。それはわずらわしい質問であった。それにその質問の底には女の意地悪さがうっすら感じられたのだ。「ちっともさ」僕のそっ気ない返事はかの女達を失望させてしまう。かの女達はお替りをよそってやるのが惜しそうな表情になっていくのだった。そこで僕は考え直して答える。「ちっとはね」

こうして暫くはとにかくもみんなが親切だった。だが葬式のほとぼりがさめてくると、女達はだんだんつれない本性を見せつけたものだ。伯母の唇に毒気がにじんできたし、僕を見るといまにも尻を打ちたそうだった。ほかの女達はうす汚ない乞食の児でも眺める眼付だ。僕は身をひるがえした。畜生ッ、なんて薄情なやつらだ。この言葉は父のセリフだった。父は女達がやってきた時も、こなくなってからも不機嫌であった。

薄情になった女達のようすは僕の気分を損ねたが、こうも考えさせられる時があるのだった。きっとこれはパルチャのせいなのだ。人間はパルチャのためにいつかは魂にされてしまう。それならせめて、生きている間でも自分のパルチャを大切にしようとしているのだろうか……。

わが家はしだいに男臭くなっていた。しかし部屋の中から母の匂いが日一日と薄れていき、それにつれて暗さが湧いてくるようだった。母との儀式を僕はぼんやり思い出すことがあった。たとえば、虫歯がぬけるとき、母は僕にこう言う。「屋根の上だよ、それは」上の歯がとれた時だった。下の歯なら、「床の下だよ」と指図する。もちろん、僕は忠実に言われた通りに捨てにいった。まちがえると、鬼歯が出るからだ。そして、母の言う通りにすると、もう虫歯にはならないという気がしてくるのであった。

父は怒りっぽくなっていた。毎朝、父は脚にゲートルを巻き、高丈（地下足袋）をはいてどこかへ出ていった。徴用で出かけていくのだ。夕方、もどってくると、飯を炊き、洗濯をする。部屋の中は放ったらかしだ。父は妹を抱いて濁酒を呑み、ひとしきり親戚をくさして眠りにつく。母との対話を僕はぼんやり思い出すことがあった。たとえば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com